

◆自分の発音を視覚的に確認しよう

<b>1 対象児童生徒（対象学級）の実態</b> 高等部 聴覚障害
<b>2 指導目標</b> ・発音を自ら意識して話す。
<b>3 取組の中心となる教科・領域等</b> ・自立活動
<b>4 使用したアプリ、周辺機器</b> ・「e-scope」：フーリエ解析ができるソフト。子音（特にサ行の摩擦音）の波形をスペクトラム表示できることから、サ行の摩擦音の指導に利用。 ・「Sonic Print」：母音をマイクに向かって発声すると、母音のF1、F2を検出して、座標上に点として呈示する機能を持つアプリで、おおむね正しく母音が発声されているかどうかを視覚的に確認することができ、母音の練習に利用。
<b>5 指導の経過及び児童生徒の変容</b> ・指導期間 9月開始～1月までの間。自立活動や授業初めの5分間程度の時間を活用して指導。 ・「e-scope」は自分の発した音を波形として、また、「Sonic Print」は座標上で視覚的に確認することができるため、iPadを用いることで積極的に一音一音を意識しようとする気持ちへとつなげることができた。 ・生徒の意識の変容を数値化することはできないが、自分が発声した音を耳でフィードバックして確認しづらい聴覚障害の生徒にとって、興味を持って発音練習に取り組むことができた。 ・今後は発音明瞭度検査を行うなどして明瞭度を数値的に把握し、今後の指導に生かしていきたい。
<b>6 指導のポイント（変容の要因、効果的な支援方法等）</b> ・これらのアプリは発音指導の後、生徒自身が自らの発音を視覚的に確認することを容易にするものである。「e-scope」は、波形の意味が理解できる生徒であれば使える。「Sonic Print」は低年齢からでも使用可能と思われる。他の学部の生徒に使用した結果、視覚的にフィードバックできるという点では興味を持つことができた。 ・子音（サ行の摩擦音）は「e-scope」では対応できるが他の子音では対応できないなど、アプリの性能に違いもあるため、子どもの実態に応じて活用することが望ましい。 ・発音練習を目的として開発されたアプリは現時点で少なく、本来別目的で作られたアプリを発音練習用として活用している。今後は、幼児児童にも使いやすいアプリの開発に向けて、大学等の機関と連携できると良い。